



被災者の多様で個別的な安心についてお絵描きを通して思索する活動

ロニー, アレキサンダー
桂木, 聡子
勅使河原, 君江

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 15(2):53-65

(Issue Date)

2022-03-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

<https://doi.org/10.24546/81013202>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013202>



被災者の多様で個別的な安心についてお絵描きを通して思索する活動

Activities to elucidate the diversity of individual portrayals of feeling safe by
disaster survivors as portrayed in their drawings

アレキサンダー・ロニー* 桂木 聡子** 勅使河原 君江***

Ronni ALEXANDER * Satoko KATSURAGI ** Kimie TESHIGAWARA***

要約：本研究は、お絵描きという非言語コミュニケーションを用いたワークショップで参加者が災害被災者のウェルビーイングを実現するための安全・安心を考える活動を実施し、そのワークショップでお絵描き活動が参加者間の思索にどのような役割とプロセスでコミュニケーションを深めることができるかを検討する。また、それらの検討を通して、被災者のウェルビーイングにつながる安心についての考察を試みた。本ワークショップにおいては、講演者から東日本大震災で被災した体験を伺い、その後に避難袋に何を入れたら避難所での安全・安心を得る事ができるかをグループで一枚の絵を描きながら参加者間で考える活動を行った。その活動で参加者の会話記録と描かれた絵を照合しながら検討すると、絵を描く行為が会話を促進し、促進された会話が絵を描く行為を促進していることがわかった。また、絵を描くことで参加者たちにとって被災時の安心を支えるための物や事が視覚的に明確になり、被災者にとっての安心とは多様かつ個別的であることが浮かび上がってきた。これらワークショップの分析から、災害時の被災者支援において、被災者の安心を保持するための支援を行う際に、被災者にとって一人ひとり異なる安心を支えるためのニーズに着目して対応する必要があるという指針を得ることができた。

キーワード：安全・安心、被災者、ウェルビーイング、アートを用いた非言語コミュニケーション、お絵描き活動

1. はじめに

本研究は、地震や津波などの災害被災者の包括的なウェルビーイングを考えるにあたって、「安全・安心」に着目し、「安心」をキーワードに、お絵描きという非言語コミュニケーションを用いて参加者が被災者の安全・安心を考えるワークショップを実施し、被災者にとっての安心とはどのようなものであるかを考察することを目的とした。本稿では、はじめに被災者の安心を得ることによって実現するウェルビーイングの定義と概念について先行研究に基づき検討を行い、本研究において被災者のウェルビーイングを実現するための安全・安心と非言語的コミュニケーション、とりわけ絵やお絵描きに関連付けた経緯について説明する。その後、お絵描き活動を用いた被災者にとっての安心を参加者が考えるワークショップの実践記録をもとに考察を行い、被災者にとっての安心とはどのようなものなのか、

そして、その安心を得るための被災者支援のあり方についても触れていきたい。

2. 被災者のウェルビーイングを実現するための安心に着目し本研究にお絵描き活動を取り入れるようになった経緯

この節ではまず、本稿における被災者の安心によってもたらされるウェルビーイングについて提示し、その後に被災者にとっての安全・安心に関する先行研究に基づいて被災者にとってのウェルビーイングを実現するための安心とはどのようなものかを整理する。

2-1. 被災者の安心によってもたらされる被災者のウェルビーイングについて

「ウェルビーイング (well-being)」は、英語圏の国々では一般的に使われる言葉である。しかし、そ

* 神戸大学大学院国際協力研究科教授
** 兵庫医療大学教授
*** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

(2021年10月7日 受付)
(2022年1月24日 受理)

の意味は状況や専門などによって異なり曖昧で幅広い概念でもある。「元気・健康」「幸せで健康に暮らしている」「ネガティブな感情が少なく、ポジティブな感情が多い状態」「生活や人生に満足している」ことなどが一般的な定義である。状況としてのウェルビーイングは、発展(成長)をもたらす活動、生活に対する満足、分野別満足、活動や仕事への思い入れや関心などがある。このように定義が多様であるが、それぞれの根底にあるものとして指摘できるのは、心身の健康であるが、これもきわめて主観的なものであり、それ自体も定義しにくい¹。被災者のウェルビーイングを考えるとさらに複雑となる。ここでは「被災者」を「災害を体験した人」として定義するが、その体験は人によって違う。例えば、2011年3月11日の東日本大震災の被災者の場合、ケガをした人はもちろんのこと、ケガをしなかった人でも、薬をなくしたり避難所生活で疲れたりショックのために体調を崩したりした人は少なくない。それに加えて、大切な家族や友人を亡くしたり、家や仕事、住んでいた町そのものが流されたりして、精神的に大きなダメージを受けた人がいる。また、災害時に被災の現場にはいなかったが、多くのものを失った人や、なにも失わなかったが恐ろしいものを見た人などもいる。このように大きく状況の異なる人々を一括りで「被災者」と呼ぶこと自体が難しいが、先にあげた間接的にダメージを受けた人も含めた広い意味での被災者を表現するともいえる²。このような様々な状況にいる被災者にとってのウェルビーイング、すなわち「元気、健康、人生に満足している」ということとはどういうことであろうか。本稿では、「元気になる」「安心する」「前向きになる」ことのみを求めるのではなく、あるがままの内面を表現することによって今の自分の置かれている状況を受け入れることを重視し、被災者の「今」を受け入れ安心を獲得することによってウェルビーイングを実現することを目指したい。被災者は「辛抱強く、前向きな人」とステレオタイプ化されがちである。被災者の中で辛抱強く、前向きな姿がみられても、それは、その人の一面にしかすぎないだろう。ポジティブな感情を表現することは大事だが、被災者のウェルビーイングを考えると、むしろネガティブな感情も自由に表現できる場が必要であると考えられる。しかも、被災者の内面には言葉だけでは表現しきれない感じていることがあり、それを表現する手段としてお絵描き活動といった非言語的コミュニケーションが有意義であると考えた。

2-2. 被災者の安全・安心に関する先行研究について

本研究に関する先行研究として、春日(2017)³に

おいて、安全・安心について「安全」は人や物や組織などに物理的に損傷がないことを意味するが、「安心」は「個人が主観的にどうとらえるかにかかっている。」とされ、「安心」は個人が主観的にとらえるものであることを定義している。また、「安全、安心」という言葉(概念)が示されたのは阪神・淡路大震災が契機と思われる。メモリアルコンファレンス・イン・神戸実行委員会編集・発行『阪神・淡路大震災 向き合い続けた10年』(2005)の報告書において、『1996.1.18-19に「メモリアルコンファレンス・イン・神戸」が開催され、その目的は「こころ豊かで安全・安心な社会を」目指すことであった』⁴と述べられている。次に、「安全・安心」の概念について、阪神・淡路大震災記念協会編・発行『21世紀における「安全・安心」概念の検討』(「21世紀文明の創造」調査事業 研究報告書)(2005)において、『「安全・安心なまちづくり」という視点から「安全・安心」の概念について検討しておきたい』と述べて、「4-2-2 他人任せにしない安全が安心を生み出す」の項にて、安全は客観的状態、安心は心理的状態であると説明し、安全であることが認識できれば安心するため、自分の置かれている状況を正しく認識することが重要であり、そのため、自分がその状況に対して主体的に関わる必要がある、と説明し、次のように述べている。「状況に参加することによって正しい認識を得ることができ、正しく安全を認識することができれば安心することができるのである。以上より、「安心」という概念のなかには「参加」という重要なキーワードが含まれているといえよう」⁵とされている。このように被災者のウェルビーイングを支えるための安全・安心のうち、安全は人や物や組織などに物理的に損傷がないことを意味するが、安心は個人が主観的にとらえるものであり、その自分にとっての安心は参加という活動を通して認識するというプロセスで生まれることがわかった。

2-3. 本研究でお絵描き活動を取り入れるようになった経緯

2011年3月11日に起こった東日本大震災後、「ボランティアバス先遣隊」という取り組み⁶において、被災地での活動に、ポーポキ・ピース・プロジェクト⁷の考え方に基づく活動を行い、その際に発案したお絵描き活動が最初であった。同プロジェクトのシンボルキャラクター、ねこの「ポーポキ」を長い布(5m×45cm)に描いた。そして、宮城県の避難所では「自由に描いて良いよ」と言っただけで人が集まってきた。高校生の女の子はおばあさんや友だちと相談しながら、うれしそうに4匹のねこの顔を描いた。名前やそれぞれの特徴をつけな

がら、楽しそうに笑っていた。しかし、その後、彼女と話した時、彼女は「実は、猫たちはもういないの。」と言い、猫が津波に流され、どこにいるかわからない、という話だった。津波からまだ日が浅い当時において、多くの人々の安否はまだ確認できていなかった。そんな中、行方不明の猫のことを表に出して悲しんだりすることができなかった高校生にとって、お絵描き活動をきっかけに最も気になっていることを話すことができた。その後も「先生」の顔を描いては消し、また描いては消すという行動を繰り返す小さな女の子がいた。急に生活が変わり、毎日会っていた先生に会えなくなり不安がっていたようだ。十分に自分の気持ちがまだ表現できない子どもにとって、お絵描きは極めて重要なコミュニケーションツールであることが確認できた。そして、この活動は少しずつ変化していき、被災地で、初めは「自由に描いて」という提案をしていたが、徐々に「人に分けてあげたい安心」「おうち」「平和」「安心」などを描くように緩やかに提案するようになった。その後、活動の内容も当初の被災地支援から「共有したい安全・安心や平和」へと意識をむける活動に変わっていった。また、活動は拠点であった神戸や東北の被災地で始まり、徐々に国内外のほかの地域にも広がっていった。お絵描きという行為は空間や場所、世代、特徴、言葉といった違いを超えることに気づいた。「安心」など、言葉になりにくい気持ちは場合によっては、絵によって表現ができ、そしてその絵について語るることによって、言葉にできなかったことが言葉にできるようになることもあった。活動の現場で実感したことは、このように被災地でのお絵描き活動が被災後の安心を考えるツールとして有効なのではないかということである。¹⁰

本稿は表現方法としての「お絵描き」に着目しているが、これまでの被災地で活動を続ける中で、これらのお絵描き活動が安心を考えるプロセスとしてみる意義について触れたい。災害後は被災者をはじめ、支援者にとっても様々な適応能力が必要になり、激しい変化に適応しようと奮闘している人々の姿が見受けられた。しかし、そのような状況でも絵を描いている間は自分だけの世界が作られ、その自分の世界の中では安心できる状況がうまれていた。大きな災害が起こると、自らの生活をはじめ、社会全体が大きく揺れ動き、場合によっては崩壊してしまうときもある。多くの人は、その異常事態に心も身体も興奮し混乱する。そして、自分を安定させるために、恒常性を保とうとして心身のエネルギーを消耗してしまう。そして無口になったり逆に饒舌になったり、イライラしたりしてくる。しかし、お絵描き活動に参加すると、何かを描かなければと思いつつも描き始めることで、話さなければならぬとい

う状態から解放される。そして、絵を描くことで想像力を刺激したり、人が描いている絵を見ることで、他者が自分とは違う世界をもつ存在であることにも気づく。この状況から少しずつ口から言葉が出てくる。自分の居場所や安心な場所を少しずつ確認しながら、ほんの少し話すことで、落ち着いてくる。¹¹このように、これまで被災地でのお絵描きを通した安心を考える活動によって、参加者が感情と思考の殻を打ち破り、参加者自身の力で自分の内なる世界を導き出す姿をみとることができた。そこで生まれた安心が人ととのつながりを可能にするのであれば、それが被災時のウェルビーイングにつながるのではないかという思いからお絵描き活動に着目しながら被災地支援を行ってきた。次の項では、お絵描き活動を用いて被災者の安全、安心を探るワークショップを実施し、その活動での参加者の会話と描くプロセスを照合してどのように会話と描く行為が影響しあって活動が進むか等を検討していく。

3. ワークショップ「絵と絵本と医療と災害の持ち寄りパーティ Part2「避難袋^{プラス} + 一品」皆で安全・安心を描こう！安全・安心な社会を語ろう」の活動内容

「絵と絵本と医療と災害の持ち寄りパーティ」は、「アート・災害・安心研究会」（神戸大学社会システムイノベーションセンター）の研究メンバーによって被災時の安全・安心を実証的に探ることを目的に実施された活動である。本研究で取り上げるワークショップ「絵と絵本と医療と災害の持ち寄りパーティ Part2」を実施する前に、そのプレ研究として 2018 年 3 月 17 日（土）に「絵と絵本と医療と災害の持ち寄りパーティ Part1」を神戸大学大学院保健学研究科地域連携センター、神戸大学男女共同参画推進室と連携して実施した。その際に、絵を描きながらスタッフと参加者、参加者間で描いた絵について話し合うという活動を取り入れた。絵を見ながら対話的に作品を見て鑑賞するという手法は、対話型美術鑑賞と呼ばれ、近年、美術教育の場において取り入れられており、鑑賞者一人ひとりが自分の感じ方、考え方をもとにして対話的に作品の見方を深めるという手法である¹²。その手法を被災時の安心を考えるワークショップにおいて応用化した。その際のワークショップ実践スキルを生かして本稿で取り上げるワークショップを実施するに至った。

3-1. ワークショップの活動内容

本論文中に記載するワークショップの内容に関して、参加者のプライバシーなどの人権を守るように

努め、参加者には個人情報の実施主体、目的、方法、情報管理の仕方、報告の仕方などの理解を得ており、得られた知見を論文等の形で公表する場合には、個人情報の保護のための必要な措置を講じることを伝えた。また、個人情報の管理にあたっては、漏洩、滅失、毀損などを防ぐための最大限の安全措置をとり、当事者から保有する個人情報の開示を求められた場合には、すみやかに応じる対策をとっている。

日時：2019年1月13日（日）13：30～16：00

会場：神戸学生青年センター

（兵庫県神戸市灘区山田町3-1-1）

事前申し込み参加者 27名

○会の流れ

- 13：00 受付開始
- 13：30 あいさつ
- 13：40 講演会
 ゲスト 元持幸子さん（岩手県大槌町
 在住 特定非営利活動法人つどい 事務局
 局長）
 ゲスト 赤城修司さん（福島市在住・
 写真家 高校美術教師）
- 14：40 休憩タイム
- 14：50 紙芝居「ポーポキ、安心、描ける？」
- 14：55 お絵描きタイム みんなで大きな絵を
 描きます！
- 15：30 発表タイム

活動1. 会の活動の詳細あいさつ

会の趣旨と概要の説明と会の進行の説明

活動2. 講演会

元持幸子さん（岩手県大槌町在住 特定非営利活動
 法人つどい事務局 局長）の講演

2011年3月11日東日本大震災により津波を受け、
 津波の後に火事を被った大槌町の沿岸部の街を写し
 た写真を見ながらの講演。

〈講演の抜粋〉

被災前の大槌町は、綺麗な海辺の田舎町でしたが、津波と火災の後、何も色が無い暗い感じの街になってしまいました。そして、焦げた匂いが思い出されます。この時の気持ちは、真っ暗で何もない、どうしようかという不安で何が何だか分からない感じでした。避難したばかりの時は、食べ物や水やお薬、赤ちゃんのおムツ、ミルクがなくて、お母さんも母乳が出なくなってしまっていました。赤ちゃんをお風呂にも入れてあげられませんでした。避難所で小さな子どもがいるお母さんはとても気を使っていました。少し経った時に桜が咲きました。4月後半です。この頃、私の中で桜の色が出てきたのを印

象的に覚えています。周りは何も無いのですが、お花が咲いて色があることがすごいなと感じました。普段、私は洋服で赤とかピンクとか黄色の色が好きなのですが、1年間くらい黒とかグレーの色の服しか着れなかったことが心に残っています。震災が起こった時に私が持っていたものはチョコレートです。これは友達がくれたチョコです。お守りみたいに持っていました。チョコを持っていたのは、チョコをくれた友達の言葉と支えてくれているというのがあったから、ずっと持っていました。最後には食べました。美味しかったです。最後に「土手の花見」という話をします。土手で花見をするというのは、みんなで花見をしながら土手を踏み固めて土手を固くして防災に役立てましょうという、楽しみでやっていることが実は防災をしていたそうです。こんな防災がしたいですね。

赤城修司さん（福島市在住・写真家 高校美術教師）
 の講演

東日本大震災で被災し、原子力発電所の爆発で居住区が放射能で汚染されてしまい、その後の生活を写真に撮り続け、その写真を見ながらの講演。

〈講演内容の抜粋〉

東日本大震災で、福島が先程のお話の大槌町と違うところは、目に見えないし匂いもしない放射能が空から降ってきたところです。私が住んでいたところも国の避難地域指定を受けているところです。この会で紹介する写真を選びながら、不安っていう感覚を持つことは大事なんじゃないかという感覚を新たにしました。2011年に福島のレンタルツタヤでは放射能測定器を貸し出ししています。これは、日常、放射能に不安を感じているのを測定することで不安を解消するために貸し出しをしていました。街中に「頑張ろう福島」「大丈夫、大丈夫、明るく楽しく福島」という掲示があります。これらの写真を見ていると、有害な物質があるかどうかの問題じゃなくて、不安になるかどうかを問題にしているんだと思いました。不安を持つというのは、生命を維持するのに大事な安全を得るための要素だと思うのですが、不安は行動の抑止力にもなり、ある程度の線を超えると不安と向き合えなくなるという人間のプログラムにもあるように思います。政府は2020年のオリンピックに向けて、基本的な方針として被災地がダメージを受けている姿や被災者が不安になっている姿を政府も出したくないし、市民もお祭りをやって元気にすごしたいからお互いに利益が一致していて、不安を見つめる事に対して社会全体で目を背けているのではないかというのが僕の写真を整理しての感想です。今回、神戸に伺うのにお土産を買っていこうかなと思いました。福島のお土産は嫌だ

なと思う人もいるかもしれないと思った時に「あっ、これも不安だから不安の話のネタになるかも」と思いながら買いました。



図1 講演者の写真を見ながら話を聞く参加者

活動3. 紙芝居「ポーポキ、安心って、描ける？」

ロニー・アレキサンダー作・画の紙芝居『ポーポキ、安心って、描ける？』をスタッフの朗読で参加者全員が聞く

紙芝居『ポーポキ、安心って、描ける？』のストーリーは、お絵描きが大好きな猫のポーポキがいました。お友達にペンギンのぺんちゃんがついて、毛糸やお花も大好きで、遊び相手のねこちゃんを描いていました。しかし、今日は、警報がでてポーポキは心配で泣き出してしまいます。ポーポキは避難袋のリュックの確認を始めます。始めは、生活必需品（くつした、お水）を確認していましたが、やがて自分が元気になるための好きなもの（アイスクリーム、きりんさん、りんご、本、まくら、トランペット）も入れはじめました。ポーポキは、ダンボールの中や高い見晴らしの良い場所や寒い時のコタツやホットカーペットの上にいると安心します。最後に、ポーポキは読者に「あなたなら、どんな物や場所が安心する？」と問いかけて「みんなで、安心を描いてまわりの人に教えてあげてね」と提案します。この絵本の中には読者が自分にとって安心できる物や場所、安心そのものをお絵描きするページが設定されており、読者がそのページに絵を描くことで、絵本が完成する仕組みになっている。



図2 ロニー・アレキサンダー作・画の紙芝居『ポーポキ、安心って、描ける？』表紙



図3 ロニー・アレキサンダー作・画の紙芝居「ポーポキ、安心って、描ける？」p.8
ねこのポーポキが避難袋に生活必需品（くつした、お水）が入っていることを確認する場面



図4 ロニー・アレキサンダー作・画の紙芝居「ポーポキ、安心って、描ける？」p.9
次に、ねこのポーポキが避難袋に元気になる好きなもの（アイスクリーム、きりんさん、りんご、本、まくら、トランペット）を入れる場面



図5 紙芝居「ポーポキ、安心して、描ける？」の朗読を聞く参加者



図6 班ごとに安全・安心について絵を描きながら話をする参加者

活動4. お絵描きタイム みんなで大きな紙に絵を描きます！

参加者には、紙芝居で提案された「あなたは元気を出すために何を入れますか？」「ここにあなたの安心を描いてみてください」「あなたはどんな場所で安心できますか？安心できる場所を描いてみよう」という3つのテーマから班ごとに一つ描くテーマを決めて、そのテーマで絵を描くように促した。その際に、小さく描いても大きく描いてもいいし、描かないで他の人の絵を見ているだけでもいいし、話をするだけでもよいという自由があることを伝えた。

班ごとの人数：4名～6名 × 4班

班ごとに使用した画材：画用紙（80 × 110cm）1枚、水彩クレヨン（30色）1セット

お絵かきの時間：約30分

参加者一人ひとりが個別に紙に描くのではなく、あえてグループで大きな紙一枚を共有して描く方法を採用した。その理由として、各自で一枚の絵を描くと自分の絵の中で描く安全・安心のイメージが完結してしまいがちであるからである。それに対して、あえて一枚の大きな紙を複数人で共有しながら描くと、参加者同士はお互いに描いた絵を見ながら自分の絵を描く制作プロセスの中で、他者の絵を見ることも同時に行われる。そして、「あの人の絵と私が

描いたものは一緒だな」と共感したり、「そういえば、この人が描いたものは、私にとっても大事だな」という気づきが生まれたり、「ここに描かれた安全・安心の物は自分とは違うな」と他者の安全・安心が自分の安全・安心と異なることへの発見があるという仕組みがうまくややすい。したがって、一枚に大きな紙を複数人で共有する方式を採用した。

活動5. 発表タイム

班ごとに今日の活動について感じたことや考えたことを話してもらい、全員で共有する。

3-2. 倫理的配慮

本研究のワークショップ及びインタビュー調査において、個人名が第三者に特定されないことがないこと、参加は自由意志であり拒否における不利益はないこと、ならびに本研究の目的と内容を参加者へ説明し口頭にて同意を得た。また、対象者が未成年で十分な判断能力が認められない場合などは、インタビュー対象者の保護者に、口頭にて調査結果の利用方法やプライバシー保護に配慮する旨説明を行い、口頭にて同意を取得した。

4. ワークショップ「絵と絵本と医療と災害持ち寄りパーティ Part2」における参加者の活動記録

本ワークショップにおいて、1. 東日本大震災を被災した時の話を伺う 2. 自分にとっての安心・安全について考える紙芝居「ポーポキ、安心して、描ける？」の朗読をみんなで聞いた後に班ごとに自分にとっての安全・安心についての絵を描きながら対話する時間 3. 今日のワークショップを通じて感じたことや考えたことの共有の時間 これら一連の多面的なコミュニケーション方法による過程を通じて参加者は、安全・安心に関する情報を受け止め、どのように思考を深めていったかのプロセスを検討する。ワークショップ参加者の年齢は幼児から80歳代まで幅広く、外国からの留学生も参加していた。参加者の中には、阪神・淡路大震災を被災した人も多く見られた。

4-1. 講演会（東日本大震災で被災した話）を聞いた後の感想

「東日本大震災の講演を聞いて、胸が潰れそうな気持ちになった」といった。参加者自身が阪神・淡路大震災を被災した時のことを思い出し、東日本大震災の被災者の気持ちに共感している姿が見られた。また、「講演で被災後は明るい色の服を着られなかったという話が出たけれど、自分たちが阪神・淡路大震災で被災した時も明るい色の服を着る事ができなかったし、お化粧したりできる雰囲気ではな

かった」「おしゃれをするというのは、服をきれいにしたり、メイクをししたりと水を多く使うことだから、被災時は水が大事だから、そういうことをする気にならなかった。また、まわりの人が明るい色の服を着たり、メイクをしていなかったの、避難所で浮くのが怖かった」といった発言がみられ、被災者にとって被災後の世界は色のない希望をもちにくい気持ちの世界であり、おしゃれやお化粧品といった生活の中を楽しむ気持ちを持つことに抑制的であったことを自己分析している。「私が阪神・淡路大震災を被災した時は、ファーストエイドも十分に行き届いていなかった。物質的にも精神的にもケアが十分でなかったということ思い出した」「今の私達は、防災対策をしていないというのは、震災から目を背けていることになるのかもしれない」といった被災に備えて、ファーストエイドを備えると共に、物質的にも精神的にも防災対策に目をむける事の大事さを再認識している。

4-2. お絵描き活動の記録

参加者のプロフィール

A.20 歳代女性 留学生

B.30 歳代女性 留学生

(A と B は友人関係)

C.40 歳代女性 阪神・淡路大震災経験者

D.60 歳代女性 阪神・淡路大震災経験者

E.60 歳代女性 阪神・淡路大震災経験者

F.60 歳代女性 阪神・淡路大震災経験者

(C～F は初対面)

ここで取り上げるグループのメンバー6名のうち4名が阪神・淡路大震災での被災経験者であった。

描く絵のテーマ「あなたは元気ができるために、避難袋に何を入れますか？描いてみよう！」

5. 「あなたは元気ができるために、避難袋に何を入れますか？描いてみよう！」というテーマで絵を描いた際のワークショップ参加者の絵と発言の検討
本項では、「絵と絵本と医療と災害持ち寄りパーティ Part2」の活動観察から検討を行う。

5-1. 描かれた絵についての検討

参加者は、「あなたは元気ができるために、避難袋に何を入れますか？描いてみよう！」というテーマのもと、図7の参加者が描いた絵を見ても分かる通り、6名の参加者は、各々がもし被災して避難所に滞在することになったら、自分が元気になるためには何が必要かを考え、いろいろな物を描いている。

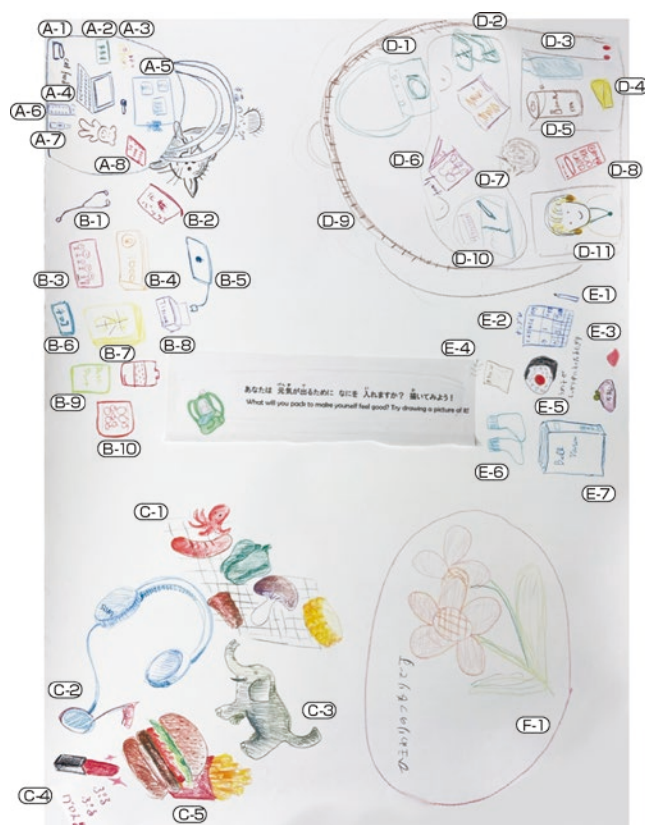


図7 「あなたは元気ができるために、避難袋に何を入れますか？描いてみよう！」というテーマで描いたグループの絵
(画中のナンバリングは筆者が描画された物の説明のために挿入した)

参加者 A)

1. キャットフード
2. お金
3. おやつ
4. パソコン
5. 家族の写真
6. くすり
7. 水
8. 書類

参加者 B)

1. イヤフォン
2. 化粧バッグ
3. 家族の写真
4. お金
5. スマホ
6. チョコ
7. 本
8. ティッシュ
9. パスポート
10. 乾燥りんご

参加者 C)

1. 災害時に火と網で焼く食事 (ガス、電気が不通になっても大丈夫)
2. お気に入りのヘッドフォン
3. 象
4. ぷるぷるグロス
5. ハンバーガーとポテト

参加者 D)

1. カメラ
2. 本
3. 水
4. チーズ
5. 500ml の缶ビール
6. 家族の写真
7. パン
8. スマホ
9. リュックサック
10. ノート
11. イヤフォンとネックレスをした自画像

参加者 E)

1. えんぴつ
2. ナンプレ
3. 「万札」と書かれたがま口の財布
4. ホカロン
5. うめ干がしっかり中に入ったおにぎり
6. あたたかい靴下
7. ベルばらの漫画本

参加者 F)

1. 冬でも欲しいひまわり

参加者 A は猫がついている大きな避難用と思われるカバンを描き、その中に A-1. キャットフードや A-2 お金、A-3 おやつ等を描いている。おそらく、飼っている猫を避難所につれて行きたいという思いがあると思われる。参加者 B は海外からの留学生であり、避難所に持って行く物として B-3. 家族の写真や B-9. パスポート等を描いている。参加者 C は初めに C-2. お気に入りのヘッドフォンを大きく描いた後に、C-3. 象の絵を描いている。活動後に参加者 C にインタビューした際に、「お絵描きの前に、東日本大震災の被災の講演をきいたり、ポーポキの絵本を読んで、前の阪神・淡路大震災を自分が被災した時には避難所で他の人に遠慮して持っていけなかった物がたくさんあったことを思い出した。なので、私は天の邪鬼だから、逆に避難所に持っていけない、持っていったらいけない物ってなんだろう？と思った時に象が思い浮かんで描きました。別に、象を持って行きたかったわけではないけれど、前に避難所に避難していた時には自分が遠慮していた気持ちを強く思い出して、もし、今後また何かの災害で被災することがあったら、避難所でも自分が持っていきたくい物を持って行って使いたいなと思いました」と述べている。このように、参加者 C は被災時に自分を元気づけ安心させるための物が必要だという価値観になっていることがわかる。参加者 D は大きな半円形のカバンを描き、その中に D-4. チーズや D-5. ビール、D-11. ヘッドフォンやネックレスをしている自分の姿を描いている。参加者 E は E-7. ナンプレ（ナンバープレース）という数字を使ったペンシルパズルの冊子を描いたり C-7. マンガを描いている。参加者 F はお絵描き活動の時間の殆どの時間、他の参加者が絵を描くのを見ていたり、絵について話をしていた。活動中に「私は絵を描くのが苦手だから」とつぶやいていた。しかし、活動の最後に一気に大きな花の絵を描いている。

このように、参加者はそれぞれ自分にとって避難所で安心して過ごせるためにはどのような状態なのかをイメージして、その姿の実現のために必要な物を描いている。避難所において、命を守り安全を確保するための物である水や寝具などは、ある程度の人々に共通しているのに対し、被災者が避難所で安心できるための物は一人ひとり多様で個別であることがこの絵からわかった。

また、避難所で安心できる物を見るとそれぞれの物は、避難する前に日常生活を送っていた時の生活と関連していることがわかる。例えば、参加者 A は猫を飼っていて、とても可愛がっているため、避難所にも連れていきたいと思っている。参加者 B は留学生であり、自分の国にいる家族を思って生活し、災害時でもすぐに帰国できるようにパスポート

を持っていて安心したいのだと思われる。また、参加者 D はヘッドフォンで音楽を聞きながらチーズをつまみにビールを飲むのが楽しい生活を送り、参加者 E は普段からナンプレのゲームをしたり、マンガを読むのが好きな生活を送っていると思われる。参加者 F は自分の部屋に花をいけて、その花の姿や香りに癒やされて生活する姿が想像される。このように、避難所で安心できる物は避難前の生活の中で自分が安心して元気になる事柄と強く関連しており、それぞれの個別的な生活に基づいているのがわかる。

5-2. 描かれた絵と発話、行為の検討

以下に記す場面は時系列順に活動を抜粋した記録である。

場面①各々が描き始めた時の発話と行為

発話	行為
D. 本を描こう	D-2 本を描き始める
C. 音楽は欲しいな	C-2 お気に入りのヘッドフォンを描き始める
A が B に話しかける 「お金は必要だね」	A-2「\$」と書かれたお札を描き始める A の隣に座る B. は A がお金を描くのをみて B-4「1000」と書かれたお札を描き始める
E. 食べ物も持って行かないか	E-5 おにぎりを描き始める
F. お花が欲しいな。チューリップがいいかな	発話時には絵を描かず

グループでの描き初めの場面では、参加者 A と参加者 B は友人関係であったため、当初より話をしながら同じお金の絵を描き始めている。しかし、参加者 C.D.E. は初対面であったためか、対話はせずに、独り言のようにつぶやきながら、おのおのの絵を描き始めている。

参加者 F は「お花が欲しいな。チューリップはいいかな」と発話しているが、この時には絵を描かずに他の人が絵を描くのをずっと見ていた。その後、活動の最後に F-1 の「ひまわりのつもりです」という文字と大きな花を一気に二輪描きあげた。

場面②二人の留学生が家族写真を描き始めた時の発話と行為

発話	行為
B. 写真を描きたい	B-3. 家族の写真を描き始める

A. 写真立てを描きたい	A-5. 家族の写真立ての写真を描き始める
C. 家族ですか？	C の隣に座る B が描く家族写真の絵を見ながら B に話かける
B. うまく描けない！	B-3. 家族の写真を描き続ける

参加者 B と参加者 C は初対面であったが、お絵かきが進むうちにリラックスしてきて、参加者 C が参加者 B の描いた絵について話しかけ、それに対して参加者 B は「うまく描けない！」と返事をしている。

場面③飲水とお酒をキーワードに対話と描画が進んだ時の発話と行為

発話	行為
C. 元気になる物・・・食べ物？	C-2. ファーストフードのハンバーガーとポテトを描き始める
D. お水いるね	D-2. ペットボトルの水を描き始める
D. ビールもいるかも！	D-5. 缶ビールを描き始める
ABCEF. (笑いながら) 500ml にしよう！ D. おつまみがあるね	D-5. 描いた缶ビールの絵に「500」という字を加筆する D-4. 三角形のチーズを描き始める

参加者 C が食べ物を描き始めたのをみて、参加者 D が水と缶ビールを描き始める。すると、缶ビールが描かれたのを他の参加者が見て、笑いながら、その描かれたビール缶を 500ml の大きな缶ビールにすることを提案している。その提案を聞いて、参加者 D は 500 と加筆し、500ml のビール缶の絵にする。この場面では、参加者 D が描く缶ビールが、他の参加者の提案で 500ml の缶ビールに変化しているのがわかる。このように、描かれる絵が参加者間の会話で変化するという現象がおきている。

活動後の参加者 C へのインタビューで「このワークショップに参加した時、私の中でファーストフードのハンバーガーとポテトを食べることにはまっていて、それを食べると元気になったので、それを描きました」と言っている。そして、この場面で参加者 D は参加者 C が描くハンバーガーを見て、初めは水を描いていたが、やがて、自分が好きなものと思われるビールを描き始めている。このように、参加者が一緒にお絵描きをしながら話をすることで、被災時に命の安全のために必要な物を描く活動か

ら、やがて自分にとって元気になる物について考えが広がり、ビールを描いたというプロセスがうまれている。

また、参加者 C にとって元気になる食べ物がファーストフードのハンバーガーであったのに対し、参加者 D は自分が元気になる物として、ビールを発想している。このように、参加者ごとに自分が元気になる飲食物が違うことがわかる。

場面④おしゃれをすることの話題がでた際の発話と行為

発話	行為
ABC. 「化粧品いるよね・・・」上の言葉を聞いて DEF 「化粧品ありますね！」	ABC が化粧品について話をはじめると DEF もその意見に賛同する
C. 口紅？ マスカラ？	C-4. 口紅を描き始める B-2. 化粧バックを描き始める
D. アクセサリーしたら (避難所で) ういちゃうかな？	D-11. イヤフォンをした自画像にネックレスを加筆する
C-4 の口紅の絵にキラキラとした光が描かれているのを見て ABDEF 「ぶるぶるグロスですね！」 D. おつまみがあるね	C-4. 他の参加者が自分が描いた口紅の絵を見て「ぶるぶるグロスですね！」と言うのを聞いて、口紅の絵の横に「ぶるぶるグロス」という文字を加筆する

参加者 A.B.C が化粧品について話始める。その話を聞いて他の参加者も化粧品は必要であると話し始め、参加者 C が描いた口紅にキラキラした光が描かれているのを見て、「ぶるぶるグロスですね！」と感想を言う。その感想を聞いて、参加者 C も口紅の絵の横に「ぶるぶるグロス」という字を加筆する。活動後の参加者 C へのインタビューで、参加者 C は普段ほとんどメイクをしないし、赤い口紅も持っていないと述べている。しかし、以前テレビで、避難所にいたおばあさんが、ボランティアさんにメイクをしてもらって、赤い口紅をしてとても嬉しそうに笑っている場面を思いだして、赤い口紅が避難所に必要だと思って、赤い口紅を描いたと話してくれた。

このグループは、お絵かき活動の前に、東日本震災被災に関する講演会の後のグループでの意見交換の際に、自分たちが阪神・淡路大震災を被災したときには、おしゃれをする気持ちになれたかったし、おしゃれをする雰囲気でもなかったと話していた。しかし、もしまた被災するような事があった

ら、避難袋に何を入れたら、自分が元気になれるかを考えるお絵描きの活動において、食べ物や水と一緒に化粧品などのおしゃれをする道具をいれる事へと参加者たちの価値観が向いているのが伺える。

場面⑤食べ物の話題の発話と行為

発話	行為
E. デパ地下のおにぎりみたいじゃなくて梅干しが入ったおにぎりがいいな	E-5. 赤い梅干しを真ん中に描いたおにぎりを描く。絵の横に「梅干しがしっかり中に入ったおにぎり」と加筆する
C. 私、きのこ好きだからー。	C-1. きのこを描き始める
F. きのこをバターで炒めると美味しいよね	Fは正面にいるCが描くきのこを見ながらの発言
C. 私は焼いて食べます!	C-1. きのこの絵の下に網を描き始める
DF. 焼いたきのこに、すだちかけると美味しいよね	C-1. きのこの下に網が描かれた絵を見ながら話す
F. 熱燗がいるね。ピーマンもいるね	C-1.Fの発言を聞いて、Cが網の上にピーマンを加筆する
ABDE みんなでピクニックに来て真ん中にバーベキューしているみたい!	
A お肉を描かなきゃ。網を広げなきゃ C. どんどん広げなきゃ! 焼きとうもろこしも・・・	C-1. CがAの発言を聞いて肉を加筆しながら、網を描き加えて輪切りのとうもろこしを描き始める
F. 前にミニトマトを串に刺して焼いて食べると美味しかった	
ABDE. 美味しそう。タコウイナー美味しいよね C. 美味しそうで、描く手が止まらないですー	C-1. CはABDEFの発言を聞きながら網の端に普通のウイナーを描いた後にタコウイナーを書き加える

場面⑤において、参加者Eが自分の好きなおにぎりを描き始め、その後参加者Cが自分の好きな食べ物のきのこを描き始めている。その、きのこの絵を見て、参加者F.D.Eは、それぞれ自分が好きな、

きのこの食べ方を話している。これは、参加者Cが描くきのこの絵を見て、参加者F.D.Eは、「自分が、もし、このきのこを食べるならどんな調理方法で食べようか」と想像して、参加者Cによって描かれたきのこを「自分も食べるきのこ」として捉えているのがわかる。参加者A.B.D.Eは「みんなでピクニックに来て真ん中にバーベキューしているみたい!」と発言しているように、もし、自分たちが被災した際にもバーベキューをした時のように楽しく食事をしたという思いを持っていることが読み取れる。

活動後の参加者Cへのインタビューで「グループの他のメンバーと話しながらかいてるうちに、あたかもこの絵の中で、みんなでバーベキューパーティをしているような感覚になりました。それで、美味しそうなものをどんどん描き加えてしまいました」と述べており、参加者が一緒に絵を描きながら話をする中で、自分が避難所に持っていきたい物やしたいことから、この絵と一緒に描いている自分たちが避難所でしたいことのイメージへと変化している。

6. 本ワークショップの記録から導きだされた、お絵描き活動と対話によるコミュニケーションのありかたと思考のプロセスについての検討

本ワークショップで描かれた絵と発話の記録から、本ワークショップについて、以下の観点で検討をする。①お絵描きとそれに伴う対話などが、どのようなプロセスで参加者間のコミュニケーションを深めているかの検討②お絵描きとそれに伴う発話などが参加者の思索にどのような役割を担っているかの検討と考察を行う。

6-1.

①お絵描きとそれに伴う対話などが、どのようなプロセスでコミュニケーションを深めているかの検討
場面②二人の留学生が家族写真を描き始めた時の発話と行為において、参加者Bと参加者Cは初対面であったが、お絵かきが進むうちにリラックスできて、参加者Cが参加者Bの描いた絵について話しかけ、それに対して参加者Bは「うまく描けない!」と返事をしている。このように、描かれた絵を通して、初対面同士の対話のきっかけを生んでおり、コミュニケーションが進んでいることがわかる。
場面③飲水とお酒をキーワードに対話と描画が進んだ時の発話と行為においては、参加者Dが描いた缶ビールの絵をきっかけに、他の参加者が500mlの大きな缶ビールにすることを提案して参加者Dが500mlと加筆する場面が見られた。この場面では、参加者Dの描いた缶ビールが他の参加者の意見で絵が加筆されるという、参加者がコミュニケーション

ンをとりながら絵が変化していく姿が見られた。この場面においては、参加者 D が他の参加者の意見を積極的に自分の絵に取り入れている姿がみられ、お絵描き活動を通して、参加者間のコミュニケーションが深まり、絵も変化する姿がみられた。場面⑤においては、活動の後半で参加者同士も打ち解けてきて、一緒にバーベキューをしているような感覚で網焼きの食べ物の話をし、参加者 C もそのイメージを共有しながら絵を描き進めている。これらの姿から、絵を描くことで自分の安心のイメージを視覚的に表出することができ、その絵として表出されたものが他の参加者にも視覚的に受け止められ、絵を描くと同時にされてる会話によって絵もまた更新されるといったプロセスをへて絵が変わっていき参加者たちは自分にとっての安心を視覚的に確認する姿がみられた。また、絵を描きその絵を共有しながら話をしてさらに絵が変わることで、参加者間のコミュニケーションも深まっていることがわかる。

②お絵描きとそれに伴う発話などが参加者の思索にどのような役割を担っているかの検討

場面④おしゃれをすることの話題がでた際の発話と行為においては、被災時にもおしゃれをしたいという話題になり、参加者 C は口紅を描き参加者 B は化粧ポーチ。参加者 D はヘッドフォンをした自分の姿の絵にネックレスを描いた。このグループの6名のうち4名が阪神・淡路大震災の経験者であった。そして、お絵描き活動の前に行われた東日本大震災被災に関する講演会の後に行われたグループでの意見交換の際に、自分たちが阪神・淡路大震災を被災したときには、おしゃれをする気持ちになれなかったし、おしゃれをする雰囲気でもなかったと話していた。しかし、このお絵描き活動と参加者間の対話が、避難所でもおしゃれを意識することで気持ちが華やぎ、自分を安心させてよかったのだという思考へと変わる役割を担っていることがわかる。また、活動後の参加者 C へのインタビューで、参加者 C 自身は、普段ほとんどメイクをしないし、赤い口紅も持っていないと述べている。しかし、以前にテレビで避難所でおばあさんが、ボランティアさんにメイクをしてもらって、赤い口紅をしてとても嬉しそうに笑っている場面を思いだして、赤い口紅が避難所に必要だと思って、赤い口紅を描いたと話してくれた。このことから、参加者 C が描いた赤い口紅の「ぷるぷるグロス」は、参加者 C 自身がつける口紅ではなく、避難所で元気をなくしている人たちの唇につけてあげたい口紅の絵であったことがわかる。つまり参加者 C は、かつて自分が阪神・淡路大震災の際の避難所でも気持ちを華やげるため

の口紅のような物があってよかったのだという思いへとこのお絵描き活動と参加者間の会話で変わってきている。

7. 被災者にとっての多様で個別的な安全・安心についての考察と今後の課題

7-1. 被災者にとっての多様で個別的な安全・安心についての考察

被災者にとっての安全・安心を参加者間で考えるワークショップ「絵と絵本と医療と災害持ち寄りパーティ Part2」の活動は、1. 東日本大震災被災経験を聞く 2. 自分にとっての安全・安心を考える紙芝居「ポーポキ、安心って、描ける？」をみんなで見る 3. グループごとに自分にとっての安全・安心を絵で描きながら話し合う といった話を聞いたり、紙芝居を見たり、絵を描いたり、他者との対話といった多様なアプローチで自分にとっての安全・安心について考えを深めていく活動構成とした。そういった活動の中で導き出された自分にとっての安心は、一人ひとりの日常生活の中で形づくられた安心を支える具体的なイメージがワークショップでの様々な活動を通してのおおの浮かび上る姿がみられた。つまり、安心とは一人ひとり個別的であり、多様であることが、ワークショップ活動から見出すことができた。

7-3. 個の安全・安心を支える支援のありかたについて

先のワークショップの考察からわかるように、個の日常生活の中から生まれるさまざまな感じ方や考え方に基づいて、その人にとっての被災時の安心が形成されているため、被災時の安心とは、実に多様なものであるということが導き出された。このことから、被災者支援をする側が「被災者とはこういう存在であるにちがいない」「支援はこうあるべき」「支援とはこういうものであるはず」といった固定的なイメージで被災者を捉えて一元的に支援をとらえるのではなく、被災者一人ひとりの多様な価値観がベースとなって被災者の安心は存在するのだという視点をもって支援のあり方を探っていくことの重要性が見いだされた。具体的には、被災者の支援とは、一人ひとりのニーズをとらえ、その情報に基づいて支援を計画し実施することが求められるのであろう。

7-2. 被災時に安心を取り戻すものを避難袋にいれる必要性

本ワークショップの参加者の活動や発話の分析を通して、被災後に衣食住を確保し、水や食料、衣類、寝る場所を確保するという事は、どの人にも共通し

た備えであるのに対し、心の安心を感じる物や場所は人によって全く異なるものであり、個別的なものであることがわかった。つまり被災者一人ひとりが安全・安心を具体的にイメージし、自分にとっての被災時のウェルビーイングを支える安心とは何かを明確にイメージしておく必要がある。しかし、被災時という状況は日常時にはイメージしにくいいため、先に述べたワークショップ活動のように、自分の被災時のイメージを考え直すきっかけを与えてくれる物語（本研究では紙芝居）を読んだり、らくがきのような気のおけない絵を描きながらおしゃべりをするといった様々な手法で自己に内在する自分にとっての安心とは何かを問うアプローチをすることで、被災時に個人的で個別的な安心のイメージを具体的に明確化し被災時の自分にとってのウェルビーイングのイメージを作っていくことができるのではないかと考えられる。

こういった自分にとって被災時の安全・安心を支えるウェルビーイングのイメージを被災時に備えて日常的に意識し、自分にとっての安全・安心を保つ物を避難袋の中に水や食料品といった物と共に安心のための物を入れておくことを推奨していく必要があると思われる。

おわりに

本研究は、だれもが「被災者」になる可能性があり、社会として東日本大震災や数々の災害を直接的、間接的に体験しているため、誰もが「潜在的被災者」であるという視点で捉えた。先行研究を検討することで、被災者のウェルビーイングを支える安心・安全のうち、安全は客観的に人や物や組織などに物理的に損傷がないことを意味するが、安心は個人が主観的に捉える心的状況であり、安全・安心に被災者が主体的に関わるという活動を通して認識するというプロセスによって生まれることが確認された。そういった視点で捉えた被災者のウェルビーイングを実現するための安心とは何かという課題において、本研究では、被災時の安全・安心についてお絵描き活動を通して考えるというワークショップを実施し、その活動の分析を通しての考察を試みた。ワークショップにおいて、参加者が被災時のウェルビーイングを支える安心を導き出す物や場所について思索する際に、非言語コミュニケーションであるお絵描き活動を活用することで、言葉で表現しにくいことを表現したりその絵について話をすることで、参加者間のコミュニケーションが促され、被災時の安心に必要な物のイメージが深められる姿がみられた。そして、その活動から導き出された被災時の安心のために必要な物は、一人ひとり違っており多様で個別的なものであることがワークショップの

分析を通して導き出された。これらのことから、今後の被災者の安心を支える支援においては、被災者一人ひとりのニーズに対応することが被災者の安心を実現することにつながるという指針を導くことができた。

今後は、被災者支援において、お絵描き活動といった非言語コミュニケーションが果たす役割をより明確にすることと、それらの活動のより有効な活用方法を実践を通じて開発していくことを課題としたい。

〔附記〕

1. 本研究は神戸大学名誉教授 朴木佳緒留先生、神戸大学名誉教授 高田哲先生、神戸大学 岡田順子先生、神戸大学 中原朝子先生にワークショップの計画と実施にご協力いただくとともに「アート・災害・安心研究会」における議論を通じて多くの示唆をいただきましたことを深く感謝申し上げます。
2. この研究は、日本学術振興会の科学研究費助成事業 研究課題名「被災者が表現活動を通して具現化する「安心」～ 寄り沿い支援の実証的研究と理論の展開」課題番号 18K 18647 を受けた研究成果の一部である。

- 1 Centers for Disease Control and Prevention HP <https://www.cdc.gov/hrqol/wellbeing.htm> (閲覧日 2021/9/20)
- 2 例えば、町がほとんど全滅し、人口の一角が亡くなった岩手県上閉伊郡大槌町の被災者は、「人を見るだけでは、どのような被害を受けているかはわからない。家族を亡くしているかもしれないし、家とか仕事とかをなくしているかもしれない。前は声をかけることができたけれど、今は昔の仲良しや同級生にも『こんにちは』という挨拶すらできない。大事な人を亡くしているかもしれないからだ。」(2015.2 アレキサンダー・ロニー聞き取り)
- 3 春日清孝、楠秀樹、牧野修也 (2017) 『<社会のセキュリティ>を生きる「安全」「安心」と「幸福」との関係』学文社 p.2
- 4 メモリアルコンファレンス・イン・神戸実行委員会編集・発行『阪神・淡路大震災 向き合い続けた 10 年』(2005) p.1
- 5 阪神・淡路大震災記念協会編・発行『21 世紀における「安全・安心」概念の検討』(「21 世紀文明の創造」調査事業 研究報告書) (2005) p.56
- 8 主催者はコープこうべ、神戸市社協、神戸 YMCA の三者によるもの。宮城県仙台市や山本町の避難所でカフェなどの活動をしながら、ボランティア受け入れの状況や活動内容の可能性を探った。この時にアレキサンダーが展開した「お絵描き活動」はその後、「ポーポキ友情物語」活動と名付けられた。同活動は今日まで続いている。

- 9 ポーポキ・ピース・プロジェクトは、五感、感性、全身をつかって平和を創造することを目的にしている平和活動団体であり、2006年1月にアレキサンダーが開始した。人間ではない平和が大好きなねこオリジナルキャラクター「ポーポキ」をシンボルとして様々な活動を行っている。想像力や表現力、つながり、エンパシーといったキーワードを使って様々な状況において平和づくりを目指している。
- 10 ロニー・アレキサンダー (2012) 「東日本大震災における被災者支援活動～「ポーポキ友情物語」プロジェクトを事例に～」『神戸大学都市安全研究センター研究報告第16号』,pp.175-186
- 11 桂木聡子 (2013) 「健康ってなに色？ポーポキ・ピース・ネットワークあなたもピースマップを一緒に作りませんか？」『兵庫医療大学紀要第1巻(第1号)』 pp.83-87
- 12 勅使河原君江 (2018) 「22. 鑑賞方法の多様化と広がり - 子どものイメージーションを活性化させる美術鑑賞 -」『やわらかな感性を育む 図画工作科教育の指導と学び』 ミネルヴァ書房 p.220